
GUNHUNTERGIRL

sola

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GUNHUNTERGIRL

【Nコード】

N3141Z

【作者名】

Sola

【あらすじ】

HUNTER×HUNTERの世界に転生トリップした少女チエリッシュがハンターになって原作イベントを極力回避しながら必死に生きる物語です。

主人公は少しトラブルメーカーですのでたまにいろんな騒動に巻き込まれます。

プロローグ

私は死んだ・・・

私は前世では何の特徴もない普通の女子高生だった。

ちなみに死因は車にはねられそうになった子供をかばっての事故死です。

確かにバトルマンガのようなファンタジーな冒険をしてみたいな！
とは思ったことはあるけど。

なんで

なんで

危険度満載なHUNTER×HUNTERの世界に転生トリップしてんだろ・・・

まあとりあえず死ぬ気で修行して念を身につけますか。

あ、言い忘れましたけどこの世界での私の名前はチェリッシュ・バートンです。

若輩者ですがよろしくお願いします。

1話 水見式（前書き）

チエリッシュは原作のゴンやキルア並の天賦の才を持っています。

1話 水見式

ここはパドキアのはずれのとある田舎の港町

その街のはずれの森に4歳くらいの一人の少女がいた。

彼女の名はチェリツシュ＝バートン

4年前に神のいたずらかこのHUNTER×HUNTERの世界に転生トリップした者である。

「ふー、ようやく纏・練・絶と四五行がまともにできるようになったわ。

ここまでできるのに4年と長かったよ」

少女はここまでの苦勞をしみじみと独り言で語っていた。

まあ、赤ん坊の頃から両親に気づかれないうにしながら瞑想をして精孔を開き、纏・練・絶・凝等と念の修行をしたのだから当然なのだが。(しかも、まだ体が幼いので念の上達に体がついていないためもある)

「さーて、水見式をやってみますかー。」

チェリツシュが両手を向け水と一枚の葉があるガラスのコップに向

かって発をすると

「どうということ・・・？」

水の中に不純物ができて水の色が変化してる・・・」

コップの水の水中には粒のようなものができて、水の色が赤くなっ
ていった。

「これって、私は得意系統は具現化系と放出系と2つもあるってこ
とかなー。」

ま、転生者補正ってところかしら

悪いことじゃないしそういうことにおおっと

というほつに1人納得した。

「あ、もうこんな時間だ。早く帰らないと父さんに怒られるわ。」

そして、彼女は目にもとまらないスピードで港街へと向かった。

2話 ガン・シヨ―(前書き)

たくさん感想待っています。

2話 ガン・シヨール

私の両親は芸人である。

なんでも昔、父ゲイル＝バートンと母ニナ＝バートンは警察だったらしく銃の腕はかなりのもので優秀だったらしい。

らしいというのは、なんでも警察がマフィアと手を組んだりして、詳しいことは知らないが、二人共世界の黒い部分を知って上司や上層部のやり方に付き合い切れなかったので辞めたそうだ。

今は射撃の特技を生かして凄いい早撃ちの曲芸撃ちを駆使したガン・シヨールをして生活している。

そして、今私は父から玩具の銃ではあるが、銃の扱い方を学んでいる。

「うーむ、チェリツシュは上達が早いな！。

さすが俺の娘だ。」

「父さんがやったことを真似ただけよ。」

（おいおい一朝一夕でここまでできるものじゃないだろ・・・）

父は百発百中での的に当てまくっている私を見て呆れていた。

そんな父が呆れていることを知らないチェリツシュは今後のことを

考えていた。

(ふう、今は原作が始まる10年前で私がハンター試験を受けられる年齢まであと6年

原作メンバー特にヒソカに遭遇したくないから早くとも原作の4年前の283期遅くとも2年前の285期にするべきだわ。この世界は死亡フラグ満載だから慎重に行動してある程度危険をなんとか自衛できるよう強くなるために頑張って修行しないと)

と必死にまじめに銃の特訓をしていた。

そして、夜

「ふー、ようやく練の持続時間は30分かー、
疲れた・・・

ゴン達はこんなきつついことしてたんだなー、凄いよ」

というふう遊び時間とかの暇さえあれば念の修行をして

それ以外は家の手伝いや銃の修行をする修行一色ハードな生活を送っていた。

3話 念銃 前編

銃の訓練を始めて1年たち、チエリツシユは5歳になっていた。

「ふー、当然といえば当然だけど、実弾が入った銃はまだ持たせてくれない。」

実はさつき父に実弾が入った銃を扱わせてほしいと頼んだのだが、父が

「少なくともまだお前には10年早い」と笑いながら言われた。

それで今、ゴム弾やBB弾の銃を使って訓練している。

(それでも子供には危険で持たせるのは早いと思うけど・・・)と考えながら、銃の訓練を始めようとしたら、黒色と銀色が混ざった色のものすごく気になる銃が目に入った。

「ねえ、父さん・・・この銃は？」

「ああ、それはずいぶん古いモデルガンさ。気に入ったのならお前にあげよう。」

その銃を凝で見ると

(いや、その銃はモデルガンなんかじゃないすごい銃だと思うけど、だって神字らしきものが刻んであるし、オーラがバンバン出てるから・・・)

訓練が終わり彼女はいつもの街のはずれの森に来ていた。当然、例の銃は持って来ている。

「さーで、早速試してみますか。」

と言って両手で銃を持ってみると

「すごい、自動的に周が発動してる。

しかも、自分の手足のような感じがする。

とりあえず、一発撃ってみよ。」

そう言いつつ、念の応用技の硬を込めながら銃を目の前の2m位の岩に向けて

ドンッ

と念弾を撃つと

バゴーン

岩が粉々になりました・・・

「・・・あまりこの銃は使わない方がいいかも
強力すぎるし・・・」

と彼女は半分呆然としていると

ガサガサッ！

「ん、なんだろ・・・」

そして、出てきたのは

「う、嘘、なんでキツネグマが・・・」

よだれを垂らした危険な肉食動物だった。

4話 念銃 後編

「グガアアアアアアアアアアア」

キツネグマは即座に口を大きく開け涎を滴らせながら襲いかかってきた。

チエリツシユはなんとかそれをかわし体勢を整えたが

(ど、どうしよー、どうしよー)

というふうにまだパニックっていた。

そんな隙をキツネグマは当然ながら見逃すわけもなく追撃してきた。

そして、チエリツシユは

(キ、キアアアアアアア)

と大慌てしながら無意識に反射的に銃をキツネグマに向けて

ズッドオオオオオオオオオオオ

とてつもなくでかい銃声と破壊音が周辺に響き渡った。

家に無事に帰宅した彼女だったが、

(つ、疲れた・・・)

うう、あのドでかい銃声は街にまで届いたもんだから騒ぎになって、警察や両親には報れないようにするのは大変だった・・・。

心身疲れ切っていた。

ちなみにキツネグマはチェリッシュが放ったあの念弾で跡形もなく消し飛んだらしい。

4話 念銃 後編（後書き）

念銃 波皇

神字が刻まれたオーラを込めることで念弾を撃つことができる念能力者専用の銃

念を知らない人にとってはただの使えない銃なためにいつのまにかモデルガン扱いになってしまったらしい。

能力

念能力者が持つと自動的に周が発動する。（使用者のオーラは消費しない）

使用者がピンチになればなるほど念弾の威力は増幅する。

5話 海賊襲撃

念銃を手に入れて、キツネグマのトラブルから3年たち私は8歳になっただ。

今日、両親は仕事で隣町に出かけており私は1人で留守番していた。

銃の訓練は両親のどちらかが一緒じゃないとできないので

(きつーく、自分達がいないうちにゴム弾やBB弾のものでも銃に
触れないように言われています。)

そのためこういう日は念の修行の方を中心にしています。

「よし、これで凝・隠・周・円・堅・硬・流とだいたいの応用技は
ある程度は習得だね」

念の修行は順調に進み、

円は今のところ20から30mまでできるようになり

最近、堅(練)も1時間以上維持できるようになって

結構、オーラの総量は上がっていた。

それなりに念の修行に慣れていつもどおりに過しているよ・・・

ウーウーとサイレンが町中に響き渡った。

「ん、なんだろ?」

とのんきにしていると

「か、海賊が攻めてきたぞー！」

「なんですとー!!！」

家の外に出ると町中大騒ぎだった。

「警察は何をしてるんだよ？」

「海賊の奇襲でこの街に在留していた警官全員殺されたよ」

「おいおい、襲撃してきた海賊は100人以上いるんだぜ。他の町から軍や警察の応援やハンターが派遣される頃にはこの町は壊滅だぞ」

（うわー、メチャクチャやばい状況だなー。

このままだと間違いなく甚大な被害がでる。

時間的に応援は期待できない。

仕方ない……

私1人で皆にばれないように海賊をつぶしますか……）

6話 チェリツシュVS海賊 前編

ガスッ

「ゲエッ」

ドコッ

「ハグッ」

ビュッ

「ギャッ」

「よしこれで10人」

チェリツシュは港に向かっていった。

とりあえずばれないようにフードで顔を隠しながら、

ここまで絶で気配を消しつつ

次々と海賊を倒していった。

さっきまで騒がしかった港町は住民全員が避難してがらんとしており
今、この町にいるのはチェリツシュと海賊と逃げ遅れて捕まった人
質のみである。

「まずは人質の救出から

確か皆海賊船につれて行かれていたわね。」

港 海賊船

「お願い助けて・・・」

「ひいひい」

「うわああああ」

「へへ大漁大漁だぜ」

「こいつら奴隷として高く売れそうですねー。」

「ああ、マフィアにでも高く売りつける予定だ。」

そこには60人ほどの海賊と牢に20人ほどの女・子供が捕らえられていた。

「そつえば船長はどこだ?」

「船長室で酒飲んでいます。」

「まあいい、軍や警察やハンター共が来る前にとつと引き上げようぜ」

長居は無用だ」

「あの一」

「どうした」

「町に向かった連中全員との連絡が取れません。」

「!?!? なにかあったな」

カリーン

「ん・・・」

海賊達は音がした方に目を向けると

そこには街に向かったはずの新入りが突っ立っていた。

「どうした新入り？」

「っ、っええ」

ドサッ

「「「!?!?」「」「」

いきなり男は倒れてそこにはフードで顔を隠した小柄な奴が現れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3141z/>

GUNHUNTERGIRL

2011年12月13日00時53分発行